

氏 名 : 川 添 郁 夫  
学位の種類 : 博士 (健康科学)  
学位記番号 : 研博第 32 号  
学位記授与年月日 : 平成 27 年 9 月 9 日  
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条 1 号該当  
論文題目 : 統合失調症者家族の生きがい感と家族機能に影響を及ぼす要因  
論文審査委員 : 主査 大 山 博 史  
副査 出 雲 祐 二  
副査 今 淳

## 論文内容の要旨

### I はじめに

統合失調症の発生頻度は 0.7% と高く、精神疾患の中でも中核を占めている。症状は多彩で再発を繰り返し慢性的に経過し、社会生活に深刻な影響を与える。

精神障害者の治療は入院から地域社会へとシフトしつつあるが、偏見は根強く残り、福祉施策の遅れが指摘されるように、家族の孤立や高負担の状況に大きな変化は見られない。

近年では、統合失調症者家族への支援の重要性が明らかとなっているが、十分されているとは言い難い状況にある。

統合失調症者家族は、援助者として役割を果たす一方で、生きがい感のある生活を願って暮らす生活者である。援助の提供と生きがい感のある生活を送れる条件を明らかにすることは重要である。また、家族機能は統合失調症の再発に影響を与え、家族機能の改善が統合失調症者の予後を改善することが知られている。

本研究は、統合失調症者家族の生きがい感の程度と生きがい感に影響を与える要因を明らかにする (モデル 1)。さらに、統合失調症者家族の家族機能に着目し、家族機能の現状と特徴、家族機能に影響を与える要因を明らかにする (モデル 2) ことを目的とした。

### II 研究方法と対象

1. 対象は東北地方 A、B 県に居住し統合失調者を持つ家族で同意が得られた 109 名。無記名自記式質問調査を郵送回収法にて実施。調査時期は 2013 年 1 月から 2013 年 4 月。
2. 質問紙構成は基本属性（年齢、性別、就職状況、他）。生きがい感スケール、家族機能測定尺度は、主観的統制感尺度、抑うつ度尺度、健康関連 QOL 尺度、ストレス尺度、他。
3. 分析方法は、t 検定、相関係数、重回帰分析、多重ロジスティック回帰分析、コレスポンデンス分析を使用した。統計処理には SPSS21J を使用し、有意水準は 5%未満とした。
4. 倫理的配慮

協力依頼には研究の趣旨、方法を記載し、研究参加への自由意思を尊重した。所属する施設の倫理審査を受け、ヘルシンキ宣言に基づき実施しプライバシーを厳守した。データ管理は施設場所に保管した。

### III 結 果

1. 分析 a：統合失調症者家族の生きがい感を構成する要因
  - 1) 統合失調症者家族の生きがい感は一般成人と比較して有意差はなかった。
  - 2) 母親は父親より生きがい感が高く ( $p<0.05$ )、「意欲」は母親の方が高かった ( $p<0.01$ )。
  - 3) 母親の年代が高くなるにつれて、「現状満足感」「存在価値」が高くなっていた ( $p<0.01$ )。
  - 4) 生きがい感に影響を与えた要因は、「主観的統制感（自分自身）」 ( $\beta = 2.03, p<0.00$ )、「抑うつ度尺度」 ( $\beta = 0.45, p<0.00$ )、QOL 尺度（体の痛み） ( $\beta = 0.37, p<0.00$ )、ストレス尺度（不安不確実感） ( $\beta = -1.32, p<0.00$ )、QOL 尺度（活力） ( $\beta = 0.34, p<0.05$ ) であった。
2. 分析 b：統合失調症者家族の家族機能
  - 1) 凝集性（絆）と適応性（柔軟性）はかなり正の相関があった ( $r = 0.49, p<0.01$ )。
  - 2) 家族機能得点を効果的機能群、中間群、非効果的機能群に分類すると、母親は効果的機能群 (51.4%) が多く、非効果的機能群 (20.3%) であった。父親は中間群 (51.4%) が多く、効果的機能群 (45.7%) に比べて非効果的機能群 (2.9%) は少なかった。
  - 3) 家族機能について非効果的凝集性に影響を与えた要因は「子どもに注意が必要である」

(オッズ比 17.8 倍)、「主観的統制感 (自分自身)」(オッズ比 1.2 倍)、「QOL (日常生活役割機能：身体) (オッズ比 1.1 倍)」の各要因であった。

#### IV 考 察

##### 1. 分析 a：統合失調症者家族の生きがい感を構成する要因

- 1) 母親の生きがい感が高かった。母親は家事を子どもと一緒にやる機会が父親より多く、家事に関わりや会話の機会となり、関わる行動がそのまま子どものための自立訓練となる。子どもの自立訓練に関わり合うことにより母親が自身の「存在価値」を感じ、置かれた状況に「現状満足」を得ると考えられた。
- 2) 生きがい感は加齢に伴い低下するといわれる。しかし、本研究では年齢が高くなるほど親の生きがい感が高まっていた。「体の痛み」や「活力」の低下、心理的「抑うつ」など親自身の QOL の低下を自覚しながらも子どもへの支援を提供できている認知が、親の生きがい感獲得に影響していると考えられた。

##### 2. 分析 b：統合失調症者家族の家族機能

- 1) 家族機能は中庸を維持することが再発予防に必要である。本研究では家族は統合失調症者の苦しみを和らげるために、凝集性（家族の絆）を高めて結束して対処していることが推察された。したがって、高い凝集性や非効果的家族機能状態を示す家族は、支援が不足し孤独状態に置かれていると捉えることが必要である。非効果的家族機能を示す親に対して医療者は家族を尊重しながら支援することが必要である。
- 2) 「子どもに注意が必要である」場合は、非効果的家族機能となるリスクが高まった。「子どもに注意が必要」だと親が認識している場合は、効果的家族機能を維持し再発を予防するために医療者等による親への支援が必要だと考えられた。

## 論文審査結果の要旨

慢性精神障害者の家族は一般的に凝集性が高く、患者の病理に加えて、家族の病理を抱える傾向があるものの、家族からのサンプリングが困難なため、家族に関する研究知見は

不足している。本研究は、統合失調症者の家族（N=109）を対象とし、家族の生きがい感と家族機能に影響する要因を探索することを目的とした横断研究である。

複数の多変量解析を用いた分析の結果、統合失調症の家族の生きがい感には、家族の QOL、抑うつ及びストレス感が関与すること、また、家族機能には家族の性別、凝集性及びコントロール感が関与することが明らかとなった。一方、家族の陳述に基づく患者本人の病理の影響については関与を明らかにすることができなかった。

今後、家族の生きがいや家族機能に影響を与える要因について、家族の心理特性のみならず患者の精神病理と治療経過を併せて検討する必要がある。